

ともに生きていく、やさしい町に

～視覚障がい者との出会いから行動へ～

学年等

4年生 総合的な学習の時間・国語

ねらい

- ◇ 障がい者や高齢者の状況や思いを理解するとともに、生き方に共感し、優しさを培う。
- ◇ 点字への理解を通じて、文字をもつことの大切さ、すばらしさを知る。
- ◇ いろいろな人がいっしょに暮らしている町であることを知り、みんなが暮らしやすい町について考える。
- ◇ とともに生きていくために、様々な状況の人たちにどのように接したらよいか、自分たちにできることはないかなどを考え、行動する態度を養う。

取組みの流れ

<全9時間>

第一次 障がいについて正しく知る。Aさんと出会う。・・・3時間

第二次 高齢者について理解する。

いろいろな人が暮らしやすい町とはどんな町か考える。・・・2時間

第三次 自分たちにできることをやろう。・・・4時間

取組み

第一次 3時間 障がいについて知ろう

① 知る【当事者が綴った本から障がい者の生活や気持ちを知る】 2h

◎「ぼくたちのコンニャク先生」(写真/文 星川ひろ子 小学館)

(脳性まひの保育園の先生と園児たちの温かな交流を描く写真絵本)

◎「ふしぎ ふにゃふにゃ フランケン」(企画/原案 近藤雅則 作/絵 立花尚之介 岩崎書店)

(脳性まひの保育園の先生が、障がいについての子どもの質問に明るく答える絵本)

◎「五体不満足」「乙武レポート」「だから、僕は学校へ行く!」(乙武洋匡 講談社)

(先天性四肢切断の著者が、自身の生活体験などを綴った本)

気づかせたいこと

- ◇ 障がいのある人は、『かわいそう』なのではない。
- ◇ やりたいこと、やれることを工夫しながらやっている。
- ◇ 周りの人たちは、自然に受け入れて助け合っている。

『正しく知ること』が、相手に対して優しくなれる
一つのきっかけになると考えて・・・



② 出会う【地域に在住している視覚障がい者Aさんからお話を聞く】 1h

事前に、社会福祉協議会の方、聞きとりをお願いしているAさん、サポート役のボランティアの方と打ち合わせを十分に行った。

気づかせたいこと

- ◇ 能力を発揮しているAさんの前向きさ。
- ◇ エフされた生活の道具があること、サポートしてくれる人がいること。
- ◇ 障がいがあることで不便なことはあるが、決して不幸ではないこと。
- ◇ サポート役ボランティアの方の言葉から、声をかけることの大切さ。

『人との出会い』は、心を動かす貴重な体験であり、自分に素直になれる瞬間だと考えて・・・。

Aさんが点字をうっているところを見ている子どもたち。その速さにびっくり！



<児童の感想>

「Aさんと出会って」

- 知らないことばかりでした。目に障がいがあると「イヤ」という気持ちが多いと思っていました。でも、その気持ちは少ない。今日来たらニコニコと笑って元気いっぱいという感じがしました。信号をわたるとき、空気で「青やな～」とかかわるとか、すごいです！うち、ぜったいわからないです。
- ぼくは今日初めて目の見えない人に会いました。Aさんが一番最初です。一番いんしょうに残ったのが、オルガンをひいてくれたことです。Aさんのジョークはすごくおもしろかったです。とくに「幸せいっぱい、はらいっぱい。」と言ったのが、一番おもしろかったです。スーパーやコンビニで会ったら話しかけます。

第二次 2時間 高齢者について理解し、暮らしやすい町を考えよう

③ 知る 【高齢者の気持ち、状況について理解する】 1h

◎ 「ありがとうのヒミツ」(正本ノン アニメビデオ 社会福祉法人 中央共同募金会)を見る。

(小学生と高齢者がぶつかって体が入れ替わってしまう高齢者理解の話)

気づかせたいこと

- ◇ 高齢者の気持ちやおかれている状況。
- ◇ 「ありがとう」に込められた思いについて。
- ◇ 老人と入れ替わってしまった勇太が体験して感じたこと。(不便で困った、うれしかった)
- ◇ 今までわからなかったクラスの友だちのよさ。

同じ町で暮らしていてもすれちがうだけでは、相手のことはわからない。
顔を見て、話をしてこそ、相手のことがわかってくる。

④ 考える 【いろいろな人が暮らしやすい町とはどんな町か考える。】 1h

- ◎ 私たちの町は、いろいろな人(障がい者・大人・子ども・高齢者)が暮らしやすい町(不便なことや困ることが少ない町)だろうか？

気づかせたいこと

- ◇ 段差（あちこちにある。歩道にもある。）
- ◇ 信号（渡りにくいところがある。音の鳴らないところも多い。）
- ◇ 駅（近くの駅はエスカレーターもエレベーターもない。）
- ◇ 自動販売機（コーラとコーヒーの区別がつかない。）

◎ 社会福祉協議会の方から、「ええやん ちがっても」というテーマでお話を聞く。

社会福祉協議会の方（Bさん）からお話を聞きました。



＜児童の感想＞ 「Bさんと出会って」

私は障がいがあるということが最初かわいそうだなと思ってました。でも、今日、かわいそうじゃないとわかりました。

Bさんが言っていたのは、「ええやん ちがっても」と「みんなが笑える町に」です。私もこういうことが言える人になりたいです。人と人が助け合うということは、とてもすてきなあとと思いました。

私も困っている人がいたら、助けられる人になりたいです。ガンバッテみます。

◎ 「補助犬ができること、あなたにできること」を見る。（DVD2007「24時間テレビ」チャリティー委員会）

（小学生が補助犬を通じて視覚、聴覚、身体障がい者のこと、自分のできることを考えるきっかけとなる内容）

◎ みんなが暮らしやすい町にするために、自分たちに何ができるかを考える。

気づかせたいこと

- ◇ DVDに出てくる耳や目や手足に障がいのある人が伝えてくれていること。
 - ・「こんにちは」という挨拶の一言だけでも、そこに人がいるなということがわかって、身の安全をはかることができる。
 - ・「どうしたのかな？」「大丈夫かな？」と思う瞬間の温かい気持ちを、素直に行動であらわさせてくれたら、うれしい。
 - ・ちょっと手助けしてくれることで、ぼくたちの不便な生活が改善される。
 - ・「もし、自分だったらと考える」その気持ちがあれば、みんなが幸せになれる社会になると思う。
- ◇ 点字をやってみよう。
- ・3年生の国語の勉強ででてきた点字。先日、Aさんにうつところを見せてもらった。
- ◇ 道具やお金がなくてもできることがある。（席をゆずる。声をかける。）
- ◇ 暮らしやすい町というのは、人がやさしい（人の気持ちがやさしい）町である。

＜児童の感想＞ 「DVDを見て、自分のできることを考えて」

「ありがとうのヒミツ」のビデオを見て、私はぜったい「ありがとう」を言おうと思いました。私らにとって、この町は住みやすいか？私は住みにくいと思います。段差はいっぱいあるし、信号の青の時に音がならないところあるし。もっと住みやすいようにしてほしいです。（→次ページ）

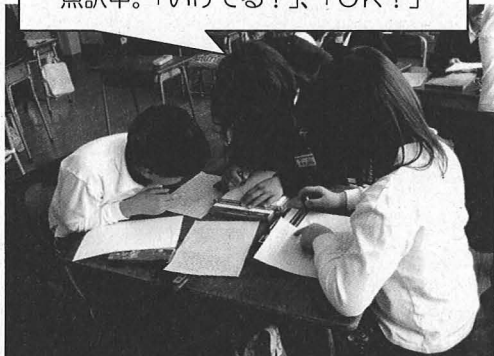
→でも、先生が言っていたように、自分らでやることはやりたいです。終わって教室に帰るとちゅう、「ありがとうの気持ち」を忘れない、自分でできることはやる、このことを守りたいと思いました。ちがっていても区別しない。5、6時間目の授業、いろんなことが心に残りました。

第三次 4時間 自分たちでできることをやろう

⑤ 動く 【今、挑戦している『点字』を生かせることはないだろうか】 4h

◎ 点訳本を作ろう。

点訳中。「いけてる?」、「OK!」



みんなで作った点訳本は公民館と児童館へおいてもらえることになりました。



◎ 自動販売機に点字シールをはろう。



できあがった点字シールを自動販売機にはりに行きました。



◎ 自動販売機のメーカーに手紙を書こう。

<児童の手紙>

「自動販売機メーカーへの手紙」

はじめまして。私たちは〇小学校の4年生です。私たちは総合学習の時間に、視覚障がいのある人と出会いました。その時、その方から、たとえば、お茶がわいたことが目ではわからないので、音で知らせる道具を使っているというのを聞いて、私たちはふつうに生活しているけれど、不便なことがたくさんあるんだなと感じました。出かけた時に、自動販売機でお酒とジュースをまちがえて飲んだということも聞きました。何とかならないだろうか、考えました。飲み物の種類を声で知らせたり、点字に表すと、こんな不便なことはなくなると思います。

まず、私たちにできることとして、点字シールを自動販売機にはることをやっていこうとしているのですが、点字のついている自動販売機ができたらいのになあという意見がでました。そこで、そういう自動販売機を作ってほしいというお願いをすることにしました。ぜひ、考えてみてください。お願いします。

取組みを終えて

「人と出会う」ことで「相手のことを知る」ことができ、「知る」ことで「人にやさしくできる」ようになる。教員である自分もそうだが、児童たちにもそうあってほしいと願い、人との出会いを大切にしてい

た。児童たちには、視覚障がい者であるAさんと出会い、Aさんが「できないこと」も「できること」もリアリティをもって知り、「どう生きてきたか」にふれて人としての知恵について学び、話し合っていく中で、いろいろな状況の人が住んでいる町が暮らしやすい町であるために自分たちにできることはないか、考えさせてきた。

この一連の取組みは、社会福祉協議会の方と協働で授業を組み立てていった。「従来の福祉教育は車いすやアイマスクを使った疑似体験の活動が中心だったが、それでは障がいの不便な面が強調されて、『障がいのある人はかわいそう』という先入観を児童たちがもっただけで終わってしまいがちである。

そこで、当事者の生活にふれて、児童たちの気づきを促すところから始めてはどうだろうか。」という事務局長さんの言葉は、私たち教員と同じ視点であることがわかり、大きな力となった。

さらに、協議を深めていく中で、児童たちの活動を広げていくためのアイデアをもらうことができた。また、「点字をやってみたい」という児童たちの思いに応えようと、点字板を貸してくれるところも探して下さったおかげで、点字板を借りた地域の高校とのつながりもできた。

児童たちが、自動販売機のメーカーに手紙を出し、メーカーから「点字シールをはるという活動をいっしょにやりましょう。」という返事がきたということも、児童たちにとって大きな手応えとして心に残ったことであろう。

今後、自分たちの町が誰もが住みよい町にするために、児童たちが気づき、考え、行動できる人に成長していくことを期待している。

＜児童の感想＞ 「4年生の1年間の中で、1番心に残ったこと」

私が4年生で1番心に残っていることは、Aさんに聞き取りをしたことです。なぜかというと、Aさんは「視覚しょうがい」というしょうがいのある人です。生まれつき目が見えません。だけど、Aさんは子どものころバイオリンを習っていたそうです。そして今は、家でごはんをたいたりしているそうです。最後にAさんがオルガンをひいてくれました。私たちが手紙を書いて、Aさんから返事が来て、先生が読んでくれました。Aさんからの手紙はとてもうれしかったです。私が「視覚しょうがいが、いやだと思ったことはありますか。」と聞きました。Aさんは「いやだと思ったことは、ありません。」と言いました。いやだと思ったことがないということが、すごいなと思いました。

もうどう犬・ちょうどう犬・かい助犬のDVDを見て、社会福祉協議会のBさんから話も聞きました。「ええやん、ちがっても」というのを教えてもらって、私はなくなったおじいさんのことを思い出しました。おじいさんは、病気で足を半分切っていて、うまくしゃべることができませんでした。それを私と弟がこわがって、お母さんやお父さんの後ろにかくれていました。4年になって、おじいさんをこわがらないようになりました。Bさんに聞いた「ええやん、ちがっても」というのは、見た目はちがっても、思ったり感じたりすることはいっしょで、みんな同じようにくらしている。「ええやん、ちがっても」というのは、そういうことかなと思いました。

【ポイント】

- ☆ 学校と社会福祉協議会が事前に綿密な打ち合わせを行い、子どもたちに伝えたいことを福祉と教育の両面から考えて授業案を作成している。このような事前打ち合わせによって、子どもたちだけでなく教員も福祉教育の重要性を理解することができる。
- ☆ 「知る→出会う(体験)→考える」といった体験学習のプロセスに加え、最後に子どもたち自らが企業に手紙を書くなど、社会に対して「行動」している。「自分たちの気づき」が行動することによって実際に役に立つ(社会貢献)ことを実感し、子どもたち自身が自己有用感を感じられるプログラムになっている。